

福島第1原発で
処理水の地下ト
ンネルを掘削し
たドリルの模型
について説明を
受ける生徒ら
(東電提供)

見学終了後、感想を共有
する生徒ら



第1原発見学 記者ルポ

世代つなぐ「学び」

第1原発では2016年11月、福島高の生徒13人が未成年として初めて見学し、以降、多くの高校生が訪れるようになった。記者も13人のうちの1人で、高校1年時に見学した。今年8月、安積高の見学に同行し、3歳で当時の記憶はあまりないが「福島に住んでいるからこそ、何が起きたのかを知りたい」と、放射線や復興や廃炉状況が分かる資料が用意されるなど、9年前より「学びの場」としての機能は充実していた。

生徒は構内をバスで巡り、原子炉建屋やタンク群などを見学した。建屋を見下ろすデッキが整備された。廃炉の取り組み状況を説明する資料が用意された。9年前より充実していた。「見て感じたことを、興味を持ち、理解を深めたい」という。案内役を務めた東電福島第1廃炉推進カンパニーの斎藤賢治さんが生徒に呼びかけた。生徒は今日見たことを周りの人に伝えたい。「次の世代につなげる責任を感じた」などと話し、「伝える」ことの重要性を意識した様子だった。

「通訳」が必要

一方、震災の記憶がない世代が増える中、原発事故の教訓や廃炉などを伝える人材の育成が重要だと感じた。安積高で放射線講座を担当する千葉博教諭は「震災や放射線に関する学びのフェーズ（局面）が変わってきたように感じる」とし、原発事故に伴う避難や食品検査など、混乱の中で歩んできた県民の苦勞を知ることが必要だと指摘する。

現在でも、風評被害や風化、除染土の最終処分地など課題が残り、千葉教諭は「今の子どもたちに共有することが大切」と語る。

9年前の見学で当時、同カンパニーの最高責任者だった増田尚宏さん（日本原燃社長）は「これからの廃炉を伝えるために必要なのは、専門家や原発に関する言葉を分かりやすく伝えられる『通訳』の存在」と話していた。その言葉を胸に記者を志した。今回の同行取材で生徒たちの見学の様子を見て、高校1年だった自分が重なった。当時目指した「通訳」になれるよう、これからも福島の今を伝え続けると誓った。

▲ 9月11日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

調べてわかったこと、考えたこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

震災を風化させないため「通訳」の存在は大事ですね。
身近な人から話を聞き、皆さんも「通訳」を目指してみても？

